

## 仁科勝介さん

●写真家

全市町村を回って増えた「知らないこと」  
それを知りたくてまた旅へ

仁科勝介さんは大学時代、原付バイクで全国1741市町村を巡り、地域に根づいた日常生活や風景を写真に収めるという大きな目標を成し遂げた。旅した軌跡は一冊の写真集になり、写真展も開催されて、令和2年11月から写真家として歩み始めた。そんな彼は、今春から再び各地を回る旅を始めるといいますが、何が仁科さんの背中を押しているのだろうか。地域に目を向け続ける、その思いを聞いてみた。

●取材・文……白井美樹（ライター）

大学4年を迎える春に  
全国を回る旅に出発する

仁科さんが、全国の市町村を回ると決断したのは、どうしてだったのだろう。

「最初のきっかけは、大学1年生の夏休みに、ヒッチハイクで九州一周に出かけたことでした。その中でたくさんの人や場面に出会い、日本についてもっと知りたいという思いが強まったのです」

日本のどここの場所にも、そこをふるさと

にしている人がいて、それぞれの人生があると思ったときに、有名な都市だけでなく、一つ一つの市町村を回ってみたいという気持ちが生まれたという。そして、もともと写真が好きで、写真部に入っていたこともあり、どの町でも撮影をしながら巡ることをテーマにしたのだそう。

「全ての市町村と、東京の23区を合わせると、1741。その全てを回るための準備や計画に2年を費やし、大学4年生になってから出発することになりました。

でも、途中ではたと気づいたのが、学生のうちに旅を終えるには、1日に5つ以上の町を回るようなペースで行かなければということでした。そんなに簡単に終わるものではないと分かり、30歳、40歳くらいでやっと終わってもいいのかなと思うようになりました」

そうはいっても、ぜひ実現したいという気持ちは変わらず、平成30年3月に旅に出发。ところが、出発したまさにその日、仁科さんは大きなアクシデントに見舞われ

る。乗っていた原付バイクがスリップして転倒し、右膝に全治3か月の大けがを負ってしまったのだ。

「そのときはすごくショックでした。大学4年生になる春で、周りの友達の多くは就職活動で自分の道を定めているのに、自分はまだ目標としている旅の1741分の1

の状態、先のことも見えずにフラフラしていると考え、病院の天井を眺めながら結構つくってしまいました」

でも、そこから気を取り直して旅を再開。慣れていくにつれ、ペースも次第に上がり、順調に市町村を巡っていった。

各地で撮った写真は、自分のウェブサイ

トを作り、その中に残すことにした。

「それを見た人が自分の町の名前を検索すると、必ず慣れ親しんだ風景が出てくるような、逆引き辞典みたいな構図ができればいいなと思って作成していました」と仁科さんは言う。

やがて、令和2年の1月、ついに全ての市町村を巡った。2年もかからず、学生のうちに旅を終えることができたのだ。

「最後にたどり着いたのは、屋久島。そのときは、友人が一人ついてきてくれて、旅を終えた喜びを分かち合うことができた。屋久島で少し観光をしようと、ウミガメの産卵で有名な浜に向かっていると、幸運の印といわれている彩雲が、太陽の両側に同時に2つ出ていたのです。それを見たときには、なんだか不思議な気持ちになりましたね。思い描いていた旅が、本当に実現できて、いま終わったんだと実感できた瞬間でした」

卒業後に意を決して上京  
写真家としてのキャリアが  
スタート

卒業後は、地元の岡山県倉敷市の写真館に就職。しかし、その頃にはすでにたくさ



## Profile

●にしな・かつすけ●

1996年、岡山県倉敷市生まれ。広島大学経済学部経済学科卒。  
2018年3月に市町村一周の旅を始め、2020年1月に全1741の市町村巡りを達成。2020年8月には旅の記録をまとめた本、『ふるさとの手帖』（KADOKAWA）を出版。写真館勤務を経て2020年9月からは独立。  
<https://katsusukenishina.com/>

んの人が仁科さんの旅を知っていて、反響を呼んでいた。そして、写真集を出版することになり、秋には東京で写真展を開催する企画も持ち上がった。

「写真集は写真館の仕事をしながら3か月かけて制作しましたが、渋谷パルコでの写真展となると、そのまま岡山に住んでいては会場に僕がいることができません。もしこのタイミングで東京に行かなかったら絶対に後悔すると思い、悩んだ末に写真館を辞めさせてもらい、思い切って上京することにしたのです」

写真展を開催するに当たって、無職というのも何だし、このときから写真家と名乗るようにしたという仁科さん。ちなみに、この写真展の頃は、すでにコロナ禍。その影響で帰りたくてもふるさとに帰れない人が多かった。そんな世相の中で「こんなにも日本にはふるさとがある」と感じてもらうこそが、自分の写真家としてのコンセプトになると確信したという。

### 障害者福祉センターとの出会いから社会福祉関係の取材や撮影も担う

さて、上京してから3年目を迎えた仁科

「全部の市町村を回ったからこそ言えるのですが、知れば知るほど、分からないことが増えていくものだとかさめました。自分は倉敷市が地元ではあるけれど、地元のことを全て知っているかという決してそうではありません。そういうことが、日本の市町村の全てに当てはまるので、知っているつもりにはなれないのです。

物事全般に通じることかもしれません。が、突き詰めれば突き詰めるほど、答えが出てこなくなります。自分の見えていることは本当に僅かな部分でしかなく、この際限のなさは、宇宙のような世界だなと思いますし、だからこそ面白いとも感じます」

では、今回の旅ではどんな視点で、どんな展望を持って各地を巡ろうと思っているのだろうか。

「例えば、京都、大阪、福岡、仙台などの政令指定都市も、前回は1つの市として捉えて回ってきましたが、その中でも区によって暮らしも雰囲気も違うはずなので、それを確かめたいです。さらには、いまの行政区分は、平成の大合併が顕著な例ですが、行政の都合で変わってしまった部分があります。昔のコミュニティを自分のアイデンティティとして感じている人も少なく

さんは、いろいろな人の助けや出会いもあり、企業、自治体、あるいは個人から写真撮影や取材の依頼を受けるようになった。その中のひとつに、千代田区立障害者福祉センター「えみふる」との出会いがあった。「あるラジオ番組に出演させてもらったときに、それを聞いたえみふるの職員さんから『一緒に何かできたらいいね』と連絡をもらいました。それまでは障害福祉に触れたこともなかったのですが、『知らないといけないことがここにある』と思い、一年ほど前から千代田区の障害福祉に関わりがある施設、企業、法人などを取材し、えみふるのホームページに写真入りの記事を連載させてもらいました」

頭の中で考えるのと違い、実際に自分の目で見て理解したり、分からないことがあると自分で認めていくこと——その大切さをこの取材を通して気づかされたという。

### 次なる旅はメリハリをつけて知らなかったことを掘り下げたい

仁科さんはいま、今春出発予定の新たな旅に向けて準備を進めている。そのモチベーションには、前回の旅で経験したこと、感じたことが大きく影響しているようだ。

ないと思うので、旧市町村レベルのこともちゃんと自分の目で見てみたいですね。それをいま残すことが、50年後、100年後に、少し意味があることになればいいなと思います」

前は全ての市町村を回ることに精いっぱい、一か所に留まることをしなかったという仁科さん。でも今回は旅をする中で、その土地ならではの関心を持てるテーマや縁があつたら、ちよつと長く滞在して、自分の中で納得できるまで掘り下げてみたいということだ。

ちなみに、仁科さんはこれまで保健師さんと深く接したことはないそうだが、その存在に対して感じていることも話してくれた。

「日本全国のそれぞれの町に、人々の営みや人生があつて、それが脈々とこれまでつながっていまがあります。そう思うと、そのことを互いにリスペクトしながら人々が存在している状態でないと、これからの日本はいけないのではないかと思うのです。その点で住民の方々の人生をそばで支えている保健師さんが各自治体にいるのはとても大きいことですよね。その仕事って美しいなと思いますし、格好いいなと感じます」



新たな旅の前にと自費出版した写真集『どこで暮らしても』 ¥3,300 (税込)

● <https://katsuo247.base.shop/>



この日の撮影は神田須田町。古くからの建造物が並び、しとしと降る雨が一層風情を感じさせてくれた

仁科さんは、どこを拠点にしても、これからずっと地方に携わって、その姿を伝えていきたいという。いろいろな場所に足を運び、生涯を通じて「知らないことを知ろうとする」姿勢を貫く覚悟だ。

「写真を通じて、できるだけ丁寧に、嘘のないように残していきたいですね。出会った人をリスペクトしつつ、自分の中に落とし込めたらいいなと思います」と語ってくれた。